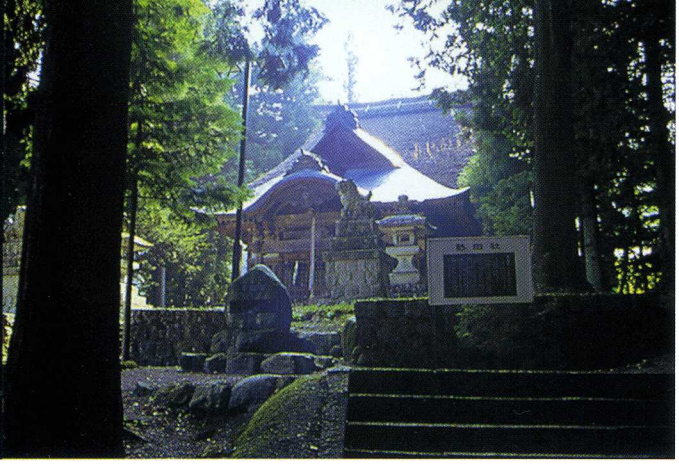


先人の匠が残してくれた偉大な宝物が

熱田神社と溝口集落

熱田神社の創建は明らかではないが、日本武尊を信仰した溝口の人たちが、尾張国の熱田神宮の形影(三方三ッ辻)をお迎えし、産土神(うぶすながみ)として祀ったのに始まる。溝口の中には現在長谷総合支所、小・中学校、郵便局などの公共施設がある。その昔、秋葉道はこの神社前を通っていた。往来した人々は旅の安全を祈願したものであろう。

集落内から出た土器を見ると縄文時代のものが見られる。古くからこの地で生活したことが伺える。

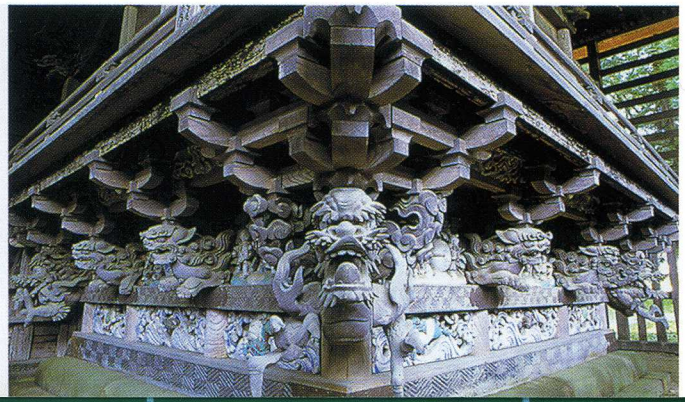
現在の熱田神社本殿は、宝暦9年から同13年(1759～1763)まで5年をかけて大改修された。建立歳記という神社保存の記録によると当時150戸ばかりの戸数であった。今は120戸ほどであるが、美和ダムによって地区外へ移住した人たちが40戸ほどになっており、今も昔も余り変りはない。

宝珠を抱えた龍

技の結集・本殿建築

本殿は、茅葺き・入母屋造りの覆屋のなかにあり、間口10尺6寸、奥行き9尺6寸、三間社造りで、規模は小さいが日光の流れをくむ特殊な建築手法と、名工による彫刻とでできあがっており、「伊那日光」と呼ばれるゆえんでもある。

正面向拝の虹梁の上に横たわる大きな龍、縁下の鬼斗(おにと)や肘木(ひじき)を用いた組物は一手先(ひとてさき)のと二手先(ふたてさき)のとあって、縁と勾欄(こうらん)を美しく支えている。この組物の下に唐獅子と龍を配してあり、隅柱には宝珠を抱えた龍一体がある。両袖障子の福禄寿・寿老人は彫物師の棟梁が刻んだといわれ、ひときわ目立つ透し彫りである。

周囲12本の丸柱の上部には巧みに鬼斗と大斗・肘木を組合せた三手先斗拱の上に桁がかかっている。唐獅子・象・龍の彫り物が一つ一つ異なった表情で調和し、重なり合っている。

南北の唐破風の兎毛通(うのけどう)しや、二重の繁垂木(しげたるき)、こけら葺の屋根まで実に見ごたえのある建築である。また、土台、長押、頭貫、脇障子柱などには地紋彫が施され、軸部材と彫刻の一部に朱塗極彩色を施している。